弥生

vol.6

02　境内の草木花 「イチョウ」

03　七五三詣 ～七つ前は神のうち～

04　『大 祓 詞（おおはらえのことば）』書写会

05　総代さんより

06-7　ワークショップ「神社の紙と日本の紙文化～紙を知ろう紙で遊ぼう～」

08　東北のお宮より「宮城県気仙沼市本吉町 八幡神社例祭」

09　古今のうた「秋の花」

10　本を読む 「七五三に読みたい本」

11　蚕影神社をたどって「蚕影神社のはじまりと海老名の養蚕信仰」

12　授与品の紹介 ～七五三詣のお祝い～

（第6号秋）平成27年11月　発行　弥生神社　046(231)2595/ email:yayoi-jinja@amber.plala.or.jp

境内の草木花

イチョウ（銀杏）

イチョウの語源を、貝原益軒が、「葉が一枚だから一葉の意味である」と解釈して以来、江戸時代にはこの説が受け入れられてきた。現在では、イチョウの葉の形が鴨の足に似ていることから、中国の宗元時代の音である「鴨脚（ヤーチャオ）」に、その呼び名が由来しているという説が有力である。

（『植物和名語源散歩』P. 203、204 ）

弥生神社境内の銀杏

掲示板

おおはらえのことば
『 大祓詞 』書写会
のご案内

11月29日（日）14:00～

注連縄奉製の集い（しめなわほうせい）

十二月六日午後一時より

鳥居と社殿を飾る注連縄（しめなわ）を藁で作ります。初めての方もお気軽にご参加（見学）ください。

「年越の大祓（おおはらえ）」 12月31日午後3時より

茅の輪くぐり～大祓詞奏上～

人形（ひとがた）でのお祓い

＊どなたでも参列できます。

七五三詣はもともと三、五、七歳それぞれにおいて行う儀式でした。男女三歳では「髪置き（かみおき）」、男子五歳では「袴着（はかまぎ）」、女子七歳には「帯解き（おびとき）」という儀式を行ないました。

「髪置き」では、男子は今まで剃っていた髪をこの日から伸ばし始め、女子はお河童であった髪を結髪にします。五歳の「袴着」で男子は初めて袴を着け、七歳の「帯解き」で女子は初めて付け紐のない着物を着て、帯を締めるのです。

このように幼児が成長していく段階ごとに儀式を行ない、宮参りをして子供の守護を氏神様に祈り、社会からも祝福を受けたのです。

また、とくに七歳は、「七つ前は神のうち」と言われ、この歳前後に氏神様に詣でることで正式に氏子入りし、はじめて社会の一員として認められました。

七五三詣

～七つ前は神のうち～

昔から十一月十五日に五歳の男子、三歳、七歳の女子が神社にお参りをして神様に成長を感謝し、今後の健やかな成長を祈願します。現在にも続いている七五三詣の源には、どのような風習があったのでしょうか。

帯の祝（『絵本女中風俗艶鏡』より）

（図）宮本常一『歳時習俗事典』p.238（八坂書房）

「七つ前は神のうち」―この伝承は、七歳になる前の子供はまだ神の領域にいることを表している。七歳になると、不安定であった子供の魂はようやく安定し、この世に定着する。七歳は、神の領域にいた幼児が人間としての子供へ移行する重要な節目であると考えられていた。

このことがわかる習わしが、伊豆大島の南に位置する利島（としま）と新島にあるという。

この島では、子供の生後十四日めに「ハカセババア」と呼ばれる産婆さんが「ハカセ」という子供の守り神を作る。ハカセは半紙を三角形に折って底の部分に米を入れ、五枚の笹の葉をさしたものである。この神は子供が七歳になるまで神棚で祀られる。そして、子供は七歳までハカセがついているから危険な場所に行っても難を逃れるなど、ハカセによる守護にまつわる伝承があった。

やがて七歳の十一月十五日に子供は晴れ着を着て氏神に参り、ハカセを納める。これは、かつての守護神を氏神に返し、以後は自分の力で災厄を振り払いながら生きていかねばならないことを意味した。この日は、家に親戚を招いて「七つ子の祝い」が行われる。これは子供がハカセの守護下を離れて人間社会の仲間入りを果たしたことを披露する祝いであるといわれている。

八木透「『ハカセ』という神の伝承」（八木透編『日本の通過儀礼』P24~26　思文閣出版）

『大祓詞（おおはらえのことば）』書写会

七月二十二日と九月十一日の昼夕に四回、『大祓詞（おおはらえのことば）』の書写会を行ないました。中学生から年配の方々まで、熱心に大祓詞を書写しました。最初に拝殿にて参拝し、お茶を飲みながら大祓詞についてのお話を少し。その後、それぞれのペースで書写をします。皆さんとても集中して取り組み、静かでゆるやかな時間が流れていました。少しずつ、大祓詞に親しんでいただきながら、穏やかな時間が過ごせますよう、今後もたびたび開催いたします。

お手本を下に置いてペンで写していきます。ふりがな付きのお手本もさしあげています。ぜひ声に出して読んでみてください。（通常90分程度。参加費500円。サインペンか筆ペン御持参ください。）

長い祝詞なので二回に分けて書くこともあります。

＊書写会の開催は、弥生神社境内の掲示板でお知らせします。また、Facebook,Twitter,Instagramにも掲載いたします。初めての方、学生さん、中高生でも大丈夫です。お気軽にご参加ください。

書写会や催しごとに社務猫ハガキをさしあげています(^^♪

常に前向きな気持ちで、新しい何かに挑戦し，自らに刺激を与えることが脳の活性化に繋がる。最近、自分の中にそんな思いが強くあり、字を書くのは極めて不得意だが、とにかく「やってみなくては判らない」ということで『書写会』に参加。始めに社殿で参拝しお祓いを受け、身を清める。社務所に戻って机に向かい、「上手く書かなくては」とか「厄介なことを始めてしまった」とか。そんな諸々の雑念を抱えながらスタート。暫くすると、ただひたすらに書くことの一点に集中。二時間ほどかけて終了。そして書き終えた時の達成感。清々しさ。心地よい疲労感。久しぶりに良い時間を過ごすことができた。「年に何回か、こうした時間が持てると有難い」。これが率直な感想。

渋谷邦夫

総代さんより

「貴重な経験」

河野誠一

弥生神社の総代会のお仲間にいれていただき早五年が過ぎようとしていますが、この間皆様のお役に立てることが何も出来なかったというのが実感です。

私自身のことでいえば、今まで経験できなかった、長い歴史と伝統のある神社への正式参拝、その際執り行われる様々な儀式など、貴重な経験でした。その祭祀の意味することころはまだほとんど理解できていませんが、その荘厳な雰囲気はおおいに気に入っています。

特に、昨年秋に参加した伊勢の外宮で行われた初穂曳（はつほびき）は特に感動しました。この祭祀（神嘗祭（かんなめさい））は天皇家が今年収穫された新米を感謝を込めて伊勢神宮に奉納する儀式とのことでした。今年の収穫を神様に感謝する新嘗祭（にいなめさい）は知識として知っている程度で、天皇陛下が新米を神様にお供えされる祀りだと思っていました。長い歴史に守られてきた神嘗祭は、全国各地から集まられた千人にも及ぶと思われる御奉仕の方々に曳かれる稲穂を載せた車（奉曳車）は荘厳そのものでした。私には本当に貴重な経験でした。

日常生活では、困った時の神頼みで神様の存在を意識することは余りないのですが、古希を過ぎ良くも悪くも様々な経験を重ねる中で、自分の努力だけではどうすることもできない、人知を超えた存在を意識し、心の奥底でその存在を畏れ敬う気持ちが出てきたように思えるときがあるように思います。

私たちの祖先は大自然の中で生きていく中で恐怖や不安、喜びを分かち合う存在として神様を意識し、心のよりどころとしてお社が造られたのではないかと思うようになりました。今の社会は複雑で真実が見えず幸せ感がなかなか持てず、不安が大きくなりがちです、心のよりどころの一つとして神社は大きな存在になってくるような気がします。

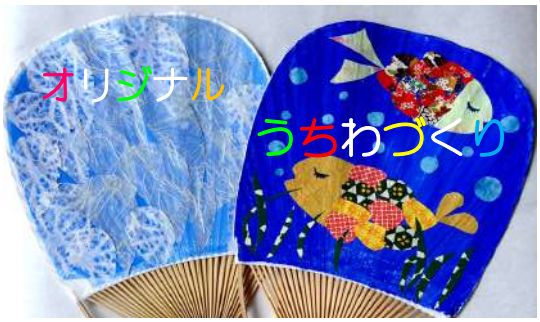
神社の境内は、私達の子供の頃の思い出の大きな部分です。かくれんぼ、缶けり、鬼ごっこをしたり祭りの夜店の光景だったりします。これからも弥生神社が地域の方々に親しまれ、子供たちの思い出の中にも生き続ける事ができるように少しでもお役に立ちたいと思います。

【写真】

平成25年4月例祭にて

ワークショップ@弥生神社

「神社の紙と日本の紙文化 ～紙を知



様々な特徴ある全国各地の和紙を並べました。

八月四日、二十二日に弥生神社にて、「神社の紙と日本の紙文化」というテーマで、お話会とワークショップを行ないました。神社で祭儀具などで使われている「紙」を紹介したのち、竹と紙でできたうちわを、全国各地の和紙と画材で装飾する、オリジナルうちわづくりのワークショップを行いました。様々な年齢層の方が集い、色とりどりのうちわが完成しました。

会場には、気仙沼市本吉町小泉の八幡神社さんの切り飾りや、生姜や竹、楮（こうぞ）…などの原料でできた「手漉（す）き和紙の見本」を展示し、「紙の本」のコーナーでは、紙に関する本や冊子を並べて、和紙文化に興味をお持ちの皆さんに楽しんでいただきました。

「紙の本」コーナー

様々な素材から作られた手漉き和紙の標本

茶香炉や植物などでゆったりできる空間を…。

気仙沼市本吉町八幡神社さんの「切り飾り」

「和紙に触れて」

八月二十二日、蝉の声が響く境内の階段を昇り、「神社の紙と日本の紙文化～紙を知ろう　紙で遊ぼう～」に参加してきました。受付に飾られた山野草に優しく迎えられ、和紙が展示された室内に足を踏み入れると、不思議と安らかな空気に包まれました。

まずは、参加者全員で参拝です。玉串を奉納する小学生の姿が微笑ましく、神様に手を合わせると心が落ち着きました。

続いて、神主さんから神社の和紙についてお話がありました。「紙垂（しで）、大麻（おおぬさ）、形代（かたしろ）、切麻（きりぬさ）」の説明や、展示されている和紙の紹介です。中でも目を奪われたのが、一枚の白い和紙から切り出された、美しい絵柄の切り飾りでした。それは、東北のお正月飾りで、東北独特の文化だということでした。そして、神と人を結ぶ緻密な伝承の技をもっと見てみたくなりました。

さあ、お待ちかねのうちわ作りです。どの和紙も色合いや絵柄がとても素敵で、なかなか選べません。触れるとどこか懐かしさを覚え、小学生の頃に集めた千代紙が思い出されました。悩んだ末、ようやく選び抜いた和紙を手でちぎり、思いのままに貼っていきます。いつの間にか時間を忘れて夢中になり、ゆったりと心地よい時間を過ごしている自分がいました。初対面の方とも会話が弾み、お互いの作品を笑顔で褒め合いました。

和紙に触れ、人に触れ、うちわ作りを心から満喫することができました。夏の終わり、手作りうちわの優しい風に包まれました。

荒谷美子

東北のお宮より

気仙沼市本吉町小泉 八幡神社例祭

九月二十七日、気仙沼市本吉町小泉の八幡神社さんの例祭が、快晴のもと斎行されました。―東日本大震災で多大な被害を受け、高台移転の後、新たな町として出発する小泉地区。例祭の日、伝統的な神事とともに、元気に活躍する子供たちの姿が印象的でした。

地元の若い皆さんが担ぐ御神輿が、本宮の鎮座する山を降りて、津波の被害にあった町の跡を渡御しました。そして、小泉川沿いに到ると、小泉地区の主産業の一つである鮭漁の繁栄を願う神事が行われ、川の水と鮭が供えられ、地元の方々が榊を捧げ祈りました。祭場より少し遠方に目を移すと、新たな産業として始められたトマトの生産場が見えました。小泉地区は高台移転が進行中で、地区の方々の住居の建設が進んでいます。

また、今年は小泉中学校の生徒さんたちが、神奈川県川崎市稲毛神社氏子青年会OBの方々による指導のもと神輿を担ぐ練習に励み、当日は、小泉小学校から八幡神社までの道を一生懸命に渡御しました。小泉小学校の先生をされていた八幡神社の山内義夫宮司さんも神輿と共に長い道のりを歩きながら、子供たちの活躍にとても嬉しそうで、声をかけたり励ましたりされていました。

そして、小泉小学校に設置された舞台では、子供たちの鼓笛隊による演奏や獅子舞が披露され、子供たちと、サポートしている親御さんたちの笑顔と歓声で活気に満ちていました。

例祭前日、神輿を担ぐ練習をする中学生

津波の碑の前にて。集合する御神輿と子供たち

獅子舞を披露する中学生

古今のうた　秋の花

秋の野を分けゆく露にうつりつつわが衣手は花の香ぞする

凡河内躬恒

『新古今和歌集』「秋歌上」三三五

「秋の野を分けて行くと露に移り、そして袖に移って、袖は秋の草花の香りがするよ。」

凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）は、三十六歌仙の一人。延喜五年（九〇五年）に紀貫之・紀友則・壬生忠岑と共に『古今和歌集』の撰者に任じられました。

「花の香ぞする」という結句は、在原元方が詠んだ歌にもあります。「霞立つ春の山辺は遠けれど吹き来る風は花の香ぞする」（『古今和歌集』「春歌下」）

どちらの歌からも、露や風といった自然によって運ばれる花の香、季節の香が漂ってくるようです。

【参考】『新古今和歌集上』久保田淳訳注（角川ソフィア文庫）

人生の裏道にふと出たやうな白萩は庭に咲きしだれたり

馬場あき子『ゆふがほの家』（平成一八年）

感情のうねりのさまに白萩の撓（たわ）みやまざり風すぎてなほ

佐藤輝子『一束の髪』（平成一二年）

こころよき透明ならんコスモスは稚（いとけな）き子の手のひらに似て

道浦母都子『風の婚』（平成三年）

青き菊の主題をおきて待つわれにかへり來よ海の底まで秋

塚本邦雄『青き菊の主題』（昭和四八年）

きりん草黄の粒つぶの花ひらき秋の黄いろのかなしみ透る

生方たつゑ『北を指す』（昭和三九年）

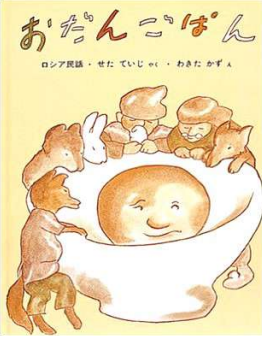
本を読む。

七五三に読みたい絵本

今回は子供と読みたい名作絵本を集めてみました。七五三にちなみ、対象年齢３歳、５歳、７歳としています。

小河洋友

（東京都内図書館勤務）



おだんごぱん

ロシア民話
日本傑作絵本シリーズ

瀬田 貞二／訳 、脇田 和／画
福音館書店（1989）
☆3歳より

おばあさんが焼いたホカホカのおだんごぱん。冷やされているうちに寂しくなって戸口からころころ外へ逃げ出します。生き生きとしたことばとリズムが、たちまち子どもの心をとらえる一冊！あたたかな色調の画は、読み始めた途端に、ことばとリズムにピッタリであることがわかるでしょう。

おやすみなさいのほん

世界傑作絵本シリーズ・アメリカの絵本

マーガレット・ワイズ・ブラウン／文、ジャン・シャロー／絵、いしい ももこ／訳
福音館書店（1962）
☆3歳より

子どもがベッドに入ったとき、子守唄のように読んであげられる絵本です。石版画によるやさしい絵柄は見る人にやすらぎを与えてくれます。一日を豊かな気持ちでしめくくることができます。

だいくとおにろく　日本の昔話　こどものとも絵本

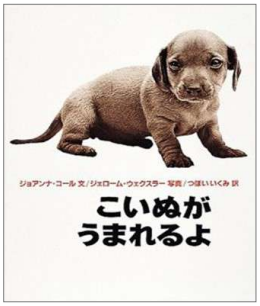
松居 直／再話、赤羽 末吉／画
福音館書店（2007）　☆5歳より

何度橋をかけても流されてしまう川。自分の目玉と引き換えに、橋をかけることを約束してしまった大工は、鬼の名前を当てれば許してやると言われ…世界各地に伝わる名当ての昔話の一つです。本書は構成が丁寧で小さな子どもにもよくわかります。大和絵風の画がとても魅力的。

ぶたたぬききつねねこ

馬場のぼる／著　こぐま社（1978）☆5歳より

題名からわかるように、しりとりの絵本です。ページをめくったとき、次のことばを言い当てるのがとても楽しい。ゴリラがリンゴから出てきたり、クマの枕がリュックサックだったり、意表を突く面白さもあります。子どもたちがことばへの興味を持ち始めたら是非一緒に読みたい一冊！！



こいぬがうまれるよ

福音館のかがくのほん

ジョアンナ・コール／文、ジェローム・ウェクラー／写真、つぼい いくみ／訳
福音館書店（1982）
☆7歳より

赤ちゃん犬が目をあけ、歩きだし、ものを食べはじめる。そんな子犬の誕生と成長を、科学的に正確に伝えています。子どもの気持ちに沿った描写でとてもわかりやすい。小さい子どもたちに、生命の不思議と尊さを伝える良書です。

蚕影（こかげ）神社をたどって

二　蚕影神社のはじまりと海老名の養蚕信仰

「蚕影神社をたどって」―序章では海老名の養蚕の歴史を、一章では本社となる茨城県の蚕影神社について掲載しました。今回は、蚕影神社のはじまりと海老名の蚕神信仰について、一冊の郷土資料より紹介します。

蚕影神社のはじまり

『海老名むかしばなし　第五集』にある「養蚕の神様」の稿に、弥生神社境内に鎮座する蚕影神社についての記述がある。

郷土史研究家の池田武治氏によるこの稿よれば、蚕の神様を祀った蚕影神社は、もとは同じ国分の山中にあり、大正年間には、そこから少し下った崖の上に移ったという。大山街道沿いの人家の間にあった参道を登ると、一、八メートル四方ほどの社に祀られており、毎年正月十四日には、木の枝にさした繭玉団子が、何組も扉の桟にさげてあったという。

この社の創建は不明だが、当地の池田善六という人が、茨城県の筑波山麓の蚕影山桑林寺から蚕影山大権現の御分霊をいただいて祀ったといわれる。

大正七年になると、社地の所有者も当人も養蚕をやめてしまい、蚕影神社は弥生神社の現在地へと移転することとなった。遷座の日は、お宮ごと神輿にして、若い衆がそれを担ぎ、各戸にお別れの意味で地域中を練り歩き、各戸主もこれに従った。有力者の家では酒がふるまわれ、そのため勢いづいて「わっしょいわっしょい」ともみ合い、大変な賑わいとなったという。

また、ご神体は陰陽の石二組で、一組は弥生神社境内にあったものを後に納めたという。その後、昭和五十三年四月に蚕影神社の社殿は修復され、現在では、安産、子授けの神様として地域の人々の信仰を集めている。

海老名の養蚕信仰

豊蚕を願う養蚕信仰、その対象となる養蚕の神様は、「蚕影大権現」と呼ばれるほか、「金色大天女」、「金色姫」とも呼ばれる。蚕影神社の他にも、海老名にはいくつもの養蚕信仰の跡が残っている。

たとえば柏ヶ谷小字滝の本下村講中に、金色姫の掛け軸が保存されており、養蚕農家の信仰の対象になっていたという。また、大谷の妙本時には木造彩色の「金色大天女像」があり、本郷の用伝橋近くには、「養蚕守護金色天女塔」がある。また、柏ヶ谷の大塚の金毘羅さまからも「奉勧請金色天女養蚕守護」のお札が出されていた。

これらの例からも、かつて盛んだった養蚕の歴史の背景には、その繁栄を願う海老名の人々の暮らしの中での信仰があったことがうかがえる。

【参考】池田武治「養蚕の神様」（海老名市広報広聴課編『海老名むかしばなし 第五集』）平成二年

授与品紹介

七五三詣のお祝いのお子様にお分けする授与品です。

綿ちりめんの巾着袋（上）と菊結びのついた髪飾り（下）です。一年間こつこつと手づくりしました。

月とうさぎと菊を描いた絵馬。巾着型の「弥生守り」と同じモチーフです。弥生神社オリジナルです。

巾着型の「弥生守り」

トンボ玉をあしらった「招福の結び守り」

社務猫からお知らせ

きーこ

こないだあたしたち雑誌デビューしたのよ。『猫びより』っていうお洒落な雑誌に載ったの。十一月号よ。

あたしたちのオリジナルハガキセットができたのよ。催しの時にお配りしてますの。豆シリーズよ。

ちょろ

編集後記

七五三詣おめでとうございます。毎年この季節になると、御社殿前の菊の花とともにお子様たちのきらきらした笑顔が溢れて、境内が華やぎます。今号では、昔から七、五、三歳という人生の通過点でどのような儀礼があり、どんな意味が込められていたのか紹介しました。子供の成長を祝い、「神の世界」から人の世界、人間社会へと迎え入れるため、それら儀礼がいかに重要であったのかがうかがえます。そして、今も昔も子を見守り、その健やかな成長に感謝し祈る気持ちに変わりはないと思えます。◆今夏より、弥生神社では新たな試みがスタートしました。『大祓詞』の書写会とワークショップです。書写会では、一文字一文字を大切に記すことで、気持ちがすーっと静かになり落ち着いたという感想をいただきました。皆さんが書写に取り組んでいる間の空気は不思議と穏やかでした。これからも、様々な催しを通して、ちょっと学べて、ゆるりとできる時間、空間を作っていきたいと思っております。ぜひお気楽にご参加ください。◆遅ればせながらの第六号…。素晴らしい原稿を書いていただいた皆さまに心より感謝申し上げます。（権）

Facebook　Twitter

編集・発行　弥生神社
海老名市国分北二-十三-十三